

牧師室から (2023.8.20)

前回は、バッハが、死までの約四半世紀をライプツィヒで過ごし、多くの宗教曲を書いたことを述べた。そこで今回はこの町について、私のわずかな知見を述べさせていただく。ライプツィヒはベルリンから鉄道で1, 2時間ぐらいのところにある。その途中にはルターの町ヴィッテンベルクがある。篤信のプロテスタントの信者が旅行すると、この2つの町を通るルートを選ぶことが多いかもしれない。ライプツィヒ中央駅はターミナル駅であり、なかなか荘重な建物である。この駅で降りてマルクト広場に行けば、普通に見ておくところはおおよそそのあたりにある。聖トマス教会、聖ニコライ教会、ゲヴァントハウス、アウエルバッハの酒場（『ファウスト』に出てくる酒場）など。

でもこういうことであれば、旅行会社の案内の方が詳しく説明してくれるであろう。そこでここでは私のこの町での個人的な経験をお話したい。ライプツィヒは数回訪ねたことがあるが、一度その街に一人で行った際に、ベルリンの交通チケットを落としてしまったことがある。ウィークリーであったかマンスリーであったか思い出せないが、残りが少なくそれほど高価なものではなかった。ベルリンに帰ってからは新しいチケットを買って、もうそのことは忘れかけていた。しかし数日後にライプツィヒの知らない人から封筒が届き、開けてみたら絵葉書となくしたチケットが入っていたのである。チケットには一応住所氏名を書くところがあったので、それで送ってくれたのである。絵葉書には心温まる一言が書かれていた。私は感動して、あらずもがな日本の乾物をお礼に送った。そのご夫婦は受け取らなかったようで、私の手元に返送されてきた。

確かに旅では、その町の重要な建物や遺跡、自然を見物するのは意味があることだと思う。ただ案外後で心に残るのは、その町での見ず知らずの人との出会いや親切、交わした言葉や目線というものも多いのではないかと思った。

(鈴木淳一牧師)